

第33回オリンピック競技大会（2024／パリ）における SBC湘南美容クリニック柔道部の成果及び日本選手の結果報告

山田 利彦, 今井 優子
SBC 東京医療大学・教養部

要旨

第33回オリンピック大会柔道競技がCOVID-19パンデミックにより1年延期後に行われた東京大会から史上初となる3年後の2024年7月27日から8月3日までの8日間, シャン・ド・マルス・アリーナにて開催された。今大会へはSBC湘南美容クリニック柔道部より60kg級に永山竜樹, 48kg級に角田夏実が出場し, 角田が金メダル, 永山が銅メダルを獲得した。そして両名がメンバーとしてエントリーした混合団体戦において, 日本チームが銀メダルを獲得し, 両名とも複数個のメダル獲得を果たした。日本チーム全体では, 金メダル3個, 銀メダル2個, 銅メダル3個という結果となった。

キーワード: 柔道, パリオリンピック, SBC湘南美容クリニック柔道部

A report on Judo in the Paris Olympic games

Toshihiko Yamada, Yuko Imai
Center of Liberal Arts Education, SBC Tokyo Medical University

Abstract

The 33rd Olympic Games Judo competition was started on July 27 at Champ-de-Mars Arena in Paris for 8 days until August 3 the first after three years past from the Tokyo Olympics which was postponed one year because of the COVID-19 Pandemic. Ryuju Nagayama and Natsumi Tsunoda both from SBC Shonan Medical Clinic Judo Team participated respectively 60 kg category and 48 kg category in Judo at this Olympics and became a Bronze medalist and a Gold medalist. In addition, Japanese Judo team took a Silver medal at the Mixed Team Event; therefore, they also got its Silver medals as the member. Japanese Judo team won three gold medals, two silver medals, and three bronze medals in total.

Keywords: judo, paris olympic games, sbc shonan medical clinic judo team

I. はじめに

第33回夏季オリンピック競技大会がCovid-19のパンデミックにより, 史上初となる1年の延期を経て開催された東京オリンピックから3年後となる2024年に, 100年ぶりの開催となるパリの地で実施された。柔道競技はアトランタオリンピック以来続いている総合開会式翌日となる7月27日から8月3日までの8日間, ところ狭しと駆け付けた超満員の観客のもと, シャン・ド・マルス・アリーナにて開催された。今大会にSBC湘南美容クリニック柔道部 (旧 了徳寺大学職員柔道部) より, 60kg級に永山竜樹, 48kg級に角田夏実が出場した。また, 両名とも, 最終日の混合団体戦に, 日本チームのメンバーとして登録され, 大会に臨んだ。

Ⅱ. 出場選手内訳

15回目を数えるオリンピックでの柔道競技へは、難民選手団を含む122の国と地域から、男子192名、女子186名の計378名が参加した。図1にあるようにヨーロッパからの出場選手が半数弱を占めており、加盟国数における参加国の割合を見ても67%と他の大陸連盟に比べて非常に高い数値を示している（表1）。しかしながら、前回の東京大会時の76%と比べると、大きく減少がみられ、前回大会と同じ60%であったアジアに近づいた形となった（表2）。また、出場者の割合もアジアが2%増加しており、ヨーロッパから2%分を奪った形となった。勿論、近年の柔道活動の中心が、欧州を基盤としていることに大きな変更はないものの、アジアの国々の強化への取り組みが功を奏し、オリンピック出場者数増加に繋がっているものと思われる。欧州に続いて、アジア、パンアメリカ、アフリカ、オセアニアの順に変動は見られなかった（図1）。

表1 出場国数及び出場選手数の大陸別内訳（パリオリンピック）

大陸連盟	参加国数	国際柔道連盟 大陸別加盟国数	加盟国数におけ る参カ国の割合	参加選手数	大陸別割合
アフリカ	31	54	57%	43	11%
ヨーロッパ	36	54	67%	180	48%
アジア	26	43	60%	95	25%
オセアニア	7	20	35%	10	3%
パンアメリカ	22	37	59%	50	13%
合計	122	208	59%	378	100%

表2 出場国数及び出場選手数の大陸別内訳（東京オリンピック）

大陸連盟	参加国数	加盟国数	加盟国数におけ る参カ国の割合	参加選手数	大陸別割合
アフリカ	32	54	59%	44	11%
ヨーロッパ	42	54	78%	197	50%
アジア	26	43	60%	89	23%
オセアニア	6	20	30%	8	2%
パンアメリカ	22	36	61%	55	14%
合計	128	207	62%	393	100%

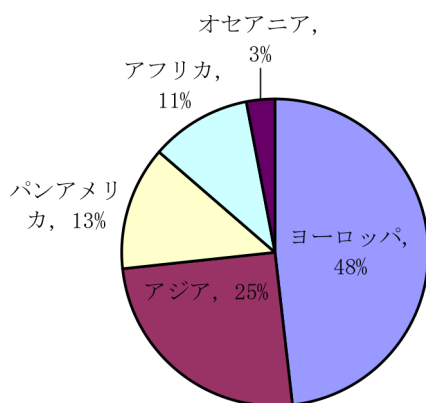


図1 大陸別出場選手割合

Ⅲ. 会場

「グラン・パレ・エフェメール（仮設のグラン・パレ）」の名で知られるシャン・ド・マルス・アリーナ（写真1）にて、柔道は実施された¹⁾。世界でも有数の柔道人気を誇るフランスにおいて開催されたこともあり、前回大会の無観客下と打って変わって、連日満員の観客が会場に押し寄せる大盛況の中での大会となった（写真2、写真3）。会場内での演出効果もさることながら、観客の声援の凄さ、特に自国フランスの選手に対しての応援はすさまじさを感じさせる様相であった。しかしながら、自国の選手のみならず、素晴らしい技で勝利した選手に対しては、たとえ敗れた相手がフランスの選手であっても、惜しめない拍手が送られていた。柔道のルールも含めて、世界一流の選手たちによる技術のすばらしさを十分に理解しており、そうした環境に一柔道家として羨ましさを感じるまでの状況であった。これだけの人気を誇る柔道競技の会場には、観客収容数8,356人のキャパシティーでは、物足りなさを感じさせるほどの盛り上がりを見せる結果であった²⁾。試合はこれまでのオリンピック同様、予選ラウンド（1回戦から準決勝前まで）と決勝ラウンド（準決勝、敗者復活戦、3位決定戦、決勝）に分けて行われた。



写真1 第33回オリンピック競技大会時のシャン・ド・マルス・アリーナの外観

Ⅳ. 試合

大会は開会式翌日となる7月27日に、シドニー大会以来採用されている男女の最軽量階級である60kg級と48kg級から開始され、SBC湘南美容クリニック柔道部の永山竜樹、角田夏実が日本チームの先陣を切って出場した。東京オリンピックでは日本代表の座を僅かの差で逃した永山のパリへの道のりは、東京までのそれとは打って変わって非常に厳しいものであった。前年の4月の時点では、あきらめざるを得ない状況まで追い込まれていた。しかしながら、ここからグランドスラム・ウランバートル大会、ワールドマスターズ大会、そしてグランドスラム東京大会と3大会を見事に制し、代表争いで後塵を拝していた高藤直寿（パーク24：東京オリンピック金メダリスト）との直接対決を制し、悲願のオリンピック代表の座を射止めた。



写真2 第33回オリンピック競技大会時の試合場



写真3 第33回オリンピック競技大会時の観客席

そうして臨んだ大会の初戦は、アウグスト（ブラジル）との対戦を迎えた。大会前に肉離れの怪我にも見舞われ、厳しいコンディションのもとでの試合は、両者、指導を一度受けたまま、GSに突入。その後、相手に偽装攻撃と脚取りの指導が与えられ、厳しい戦いとなった初戦をものにした。

続く準々決勝は、2023年の世界チャンピオン、ガリーゴス（スペイン）と相対した。立技で勝負したい永山に対して、寝技での展開で攻めるガリーゴスとの試合は、2分過ぎに相手の袖車絞の攻撃を受け、長い展開の末、審判のマテが宣告された。しかし、相手がそのまま絞め続け、マテから6秒程度経過したところで、ようやく中断したものの、その時点で永山が失神していたことで、相手の一本が宣告される結果となった。マテの後の攻防により失神してしまったことについて、本人、そして日本チームが抗議を行ったものの、判定は覆らず、永山は無念の敗者復活戦に回ることとなった。

敗者復活戦では、東京オリンピック銀メダリストのヤン（台湾）と対戦し、先に指導を2度（消極的、脚取り）受ける展開となったが、終了間際に大外刈を押し込んで技あり奪い、3位決定戦に駒を進めた。

迎えた3位決定戦はイルディス（トルコ）との対戦。序盤に永山が内股で技ありを先取。中盤に消極的との指導を受けるが、その直後、相手の一本背負投を抱分で返して、技ありを追加し、合技による一本勝ちで、銅メダルを獲得した（写真4）。

準々決勝での悔しく受け入れがたい審判の判定に見舞われたものの、その後、気持ちを切らすことなく戦い、メダル獲得につなげたことは、十分に褒められる結果であったと考える。勝負の世界にもしものはないが、準々決勝を乗り越えていればと思わせる、その後の素晴らしい試合振りであった。今回の経験を活かして、是非、次のロサンゼルスオリンピックでの金メダル獲得を目指してほしい。

一方、東京オリンピックに向けて、52kg級から48kg級に階級変更をして挑戦した角田夏実は、永山同様、あと一步届かず、補欠に甘んじた。しかし、同年5月に行われた世界選手権大会で、その2カ月後に東京オリンピック金メダリストに輝いた選手を破って優勝を遂げた。その優勝を含めて圧巻の3大会連続オール



写真4 永山竜樹の表彰式

一本勝ちで世界選手権を制し、順当にパリオリンピック日本代表の座を射止めた。全日本柔道連盟が実施した早期内定制度により、2023年6月には代表内定が決まっていたものの、その後、多くの怪我に悩まされ、パリに向けての準備は決して順調なものではなかった。

そうして迎えたパリの夢舞台での初戦は、フェレイラ（ブラジル）との対戦。開始直後から、得意の巴投で攻撃し、技ありを先取。そのまま寝技に展開し、巴投と並ぶ得意技である腕挫十字固で一本勝ち。幸先の良いスタート切った。

2回戦は、ホワイトブーイ（南アフリカ）との対戦。この試合も初戦同様、巴投で技ありを奪い、そのまま腕挫十字固に移行して、一本勝ち。危なげなく、準々決勝進出を果たした。

準々決勝は、2023年の世界選手権決勝を争った地元のブクリ（フランス）との対戦を迎えた。地元期待のブクリに対する声援で会場の盛り上がりも最高潮に達した。しかし、そうした相手に対しての声援をものともせず、1分過ぎに巴投で豪快にたたきつけ、会場は一瞬で静まり返った。その静寂の後、角田の技のすばらしさに試合中の盛り上がりにも負けられないくらい、大きな称賛をあびる結果となった。

準決勝は、直近の世界選手権3位で、18歳伸び盛りのバブルファス（スウェーデン）との対戦となった。相手に先に消極的との指導、次に角田に防御姿勢との指導、そして両者に組み合わないとの指導が与えられたのち、勝負はGSへ。相手が立ち姿勢から脇をきめる腕挫脇固の形で倒れ、指導、或いは反則負けかと思われたが、審判の宣告はなし。その後、相手が組手を切り離れた後、内股で攻めるも、直後に先の切り離しに対する指導が宣告された。この指導が累計3度目となり、相手に反則負けが宣告。粘戦を制して、決勝進出を果たした。

決勝戦は直近の世界選手権を制して勢いに乗るバフードルジ（モンゴル）と金メダルを掛けての対戦を



写真5 角田夏実の表彰式

迎えた。角田が序盤から巴投で攻め、相手に消極的との指導。中盤過ぎに両者に取り組まないとの指導で、バフドルジは後がなくなる。直後に、角田が得意の巴投で技ありを先取。この後を無難にしのぎ切った角田が見事、勝利し、日本柔道界最年長、そして日本チームの夏季オリンピックでのメダル獲得500個目となる記念の金メダル奪取を成し遂げた（写真5）。東京オリンピック後は引退も考えた角田であったが、苦しい減量やケガとの闘いにもがきながら、悲願の金メダル獲得につなげたことは、階級変更を考える選手や年齢で挑戦継続に悩む今後の選手たちにも大きな希望になったものとする。

2日目は66kg級と52kg級が行われ、東京五輪で史上初の兄妹同日優勝を果たした、阿部一二三、阿部詩（共にパーク24）が連覇を目指して出場した。阿部一二三は、リスクを避ける慎重な組手から自分のペースへ誘導し、そこからは持ち前のスピードのある豪快な技を駆使して危なげなく勝ち上がり、見事2連覇を達成した。

しかしながら、反対に阿部詩は、ケガの影響や試合出場を絞ったことから世界ランキング9位にとどまり、シード権なしでのスタートを余儀なくされた。組み合わせの配置は、世界ランキング1位のケルディヨロワ（ウズベキスタン）と2回戦で対戦するという厳しいものとなった。その試合において、技ありを先取し、相手に指導2が与えられるなど、危なげない試合内容であったが、残り1分のところで間合いを詰められ、相手の谷落で一本を奪われた。2連覇の夢だけでなく、メダル獲得さえも逃す厳しい結果に終わった。

3日目は73kg級と57kg級が行われ、五輪2連覇を果たした大野将平の同級生で補欠に甘んじていた橋本壮市（パーク24）が悲願のオリンピックに初挑戦し、世界選手権2位、2度の実力者・舟久保遥香（三井住友海上）と共に出場した。橋本は準々決勝で地元の声援を受けて波に乗るガバ（フランス）に不覚を取ったものの、気持ちを切らすことなくその後の試合をしっかりとモノにし、銅メダル獲得につなげた。

舟久保は、同年の欧州王者ビロディド（ウクライナ）に勝利し、準々決勝に進出したが、ここで、地元シジク（フランス）に開始9秒で敗退。しかし、ここから持ち前の粘り強さを発揮して、残り2試合を勝利し、銅メダルにつなげた。

個人戦の折り返しとなる大会4日目は、81kg級に前回金メダルの永瀬貴規（旭化成）、63kg級に過去2大会ではメダルに届かなかった高市未来（コマツ）が共に3回目のオリンピックを迎えた。永瀬は東京五輪後の世界選手権では、3位が最高成績であったが、この日はこれまでのオリンピックの中でも最高の勝ち上がりを見せて決勝に進出。決勝では、世界選手権を3連覇している金メダル最右翼のグリガラシヴィリ（ジョージア）を文句のない一本勝ちで下し、見事2連覇を達成した。

一方の高市は、今回こそはとの思いでパリの畳の上に上がったものの、2回戦で難敵クリスト（クロアチア）に延長戦で不覚を取り、3度目のオリンピック挑戦もメダルには手が届かなかった。

大会5日目は男子90kg級に、2023年世界選手権3位の村尾三四郎（ジャパンエレベーターサービス）、70kg級に、2023年の世界選手権を制した新添佐季（自衛隊体育学校）が出場した。この日の村尾は素晴らしい出来で、反則での勝利を含むオール一本勝ちで、決勝進出。決勝ではジュニア時代からの宿敵、前回大会金メダルのベカウリ（ジョージア）と相対した。村尾が先に小外掛で技ありを先取するも、ベカウリも谷落で技ありを返す。お互いに攻め合う好試合の決着は、終了間際、村尾の谷落にベカウリが小内刈で浴びせ返して技ありを追加し、2連覇達成。村尾は金メダルに手を掛けたが、あと一歩及ばず。しかしながら、次につながる銀メダル獲得であった。

新添は、持ち前の技の威力や自分のペースを貫く常の試合ぶりが鳴りを潜め、攻防自体に力強さが感じられない試合振りであった。準々決勝で敗退した後、敗者復活戦でも良いところなく敗れ、力を出し切れないまま7位に終わった。

大会は6日目を迎え、男子100kg級に連覇を狙うウルフアロン（パーク24）、女子78kg級に世界選手権を含めて世界への初挑戦となる高山莉加（三井住友海上）が畳に上がった。ウルフは、1、2回戦を素晴らしい内容で勝ち上がり、調子のよさを感じさせたものの、準々決勝で敗れ、敗者復活戦でも敗退し、メダル獲得を逃す7位に終わった。

高山は、準々決勝で直近の世界選手権チャンピオンに敗れるも、敗者復活戦を制して3位決定戦に進出。しかし、ここでサンパイオ（ポルトガル）に技ありを2つ奪われての一本負けを喫し、メダルにあと一步の5位に終わった。ロンドンオリンピック最終日から、リオデジャネイロオリンピック、東京オリンピックを経て、前日まで毎日メダルを獲得していた日本チームであったが、遂にそのメダルリレーもここで潰える結果となった。

個人戦最終日となった大会7日目は父・故斉藤仁との親子金メダルを目指して、+100kg級に斎藤立（ジャパンエレベーターサービス）、そして前回チャンピオン、+78kg級の素根輝（パーク24）が2連覇を目指して出場した。斉藤は初戦で前回王者との対戦、勝っても2022年の世界選手権決勝で不覚を取った相手という、厳しい組み合わせを迎えた。周囲の心配をよそに、この2試合をしっかりとモノにし、準決勝に進出。しかしここからの準決勝、そして3位決定戦共に、一本負けを喫し、親子でのメダル獲得には至らなかった。

素根も大会前から痛めていた膝のけがの影響が大きく、苦しい中で勝ち上がったものの、準々決勝で敗れた。その試合で再度、ケガをしていた場所を痛め、後の試合は棄権を余儀なくされた。

個人戦最終日もメダル獲得には至らなかった。自国開催であった前回の東京大会の結果からは、大きく後退する結果に終わったものの、前々回のリオデジャネイロ大会の金メダル3個と並ぶ結果をあげた。（表3、4参照）。

大会最終日には東京オリンピックから採用された混合団体戦が行われ、前回より7チーム増となる出場資格を満たした19チームが参加した。日本は初戦となったスペインとの試合を3-3からの代表戦による勝利でものにし、薄氷の勝利で準々決勝進出。その後、セルビアとの準々決勝を4-1、ドイツとの準決勝を4-0で下し、前回大会のリベンジ、そして金メダル獲得を賭けて、フランスとの決勝戦に臨んだ。

決勝は先鋒の村尾がしっかりと一本勝ちし、続く高山が+78kg超級の銅メダリストを破る番狂わせを演じ、日本が幸先の良い2点を先取。続く、斉藤はリネールに実力負けし、スコアは2-1。続く試合は57kg級の銅メダリストに対して、日本は2階級下の角田を起用。厳しい戦いが予想されたが、ここも得意の巴投で見事な一本を奪い、日本チームは3-1とし、金メダルに王手を掛けた。続く試合も1階級下の阿部一二三に対して、73kg級の銀メダリストとの対戦を迎えた。阿部が果敢に攻めて、相手に消極的との2度目の指導が宣告され、勝負はそのままGSに。しかし、最後は肩車で技ありを奪われ、フランスが最終戦に望みをつないだ。6人目は共に1階級下の高市、アグベニューの宿命の対決。この試合も一進一退の攻防の中、最後はGSに入ってアグベニューが技ありを奪って制し、勝負は代表選での決着に持ち越された。代表戦の対戦は抽選の結果、斉藤対リネールの対戦に委ねられた。先に斎藤が2度指導を受け、そこからリネールにも2度指導が与えられて、タイとなったが、最後はリネールが大会を締めくくるにふさわしい豪快な大内刈で一本勝ちし、フランスの2連覇を許す結果となった。混合団体戦での金メダルはロサンゼルスオリンピックに持ち越しとなったが、初優勝を果たすべく、今後、団体戦にも焦点を当てた取り組みが必要と考える。

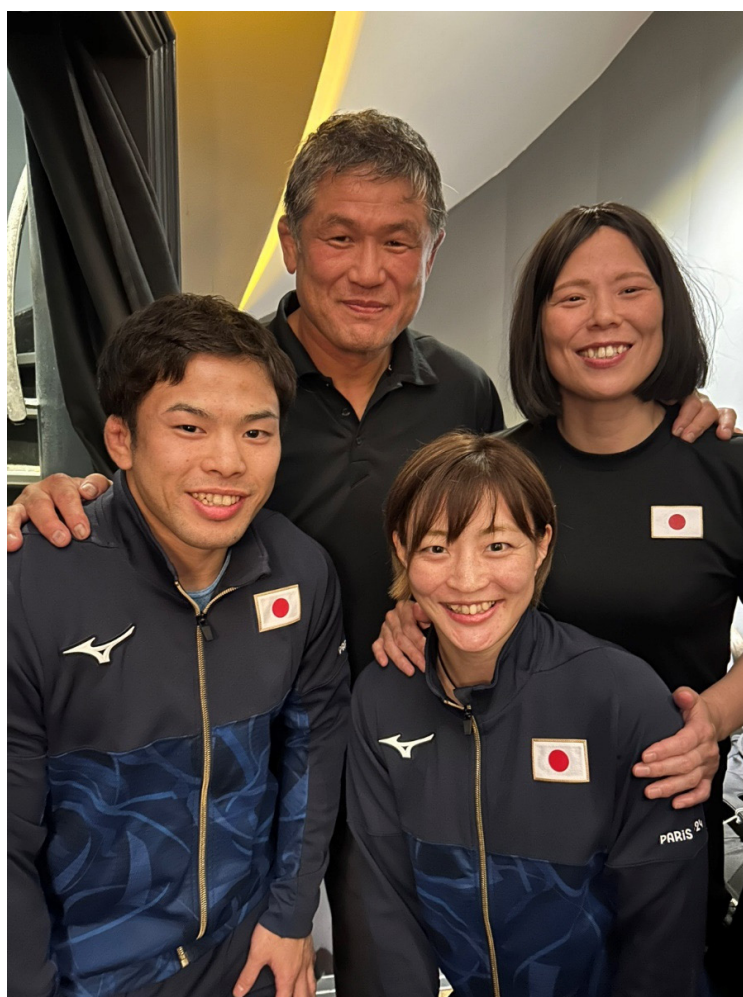


写真6 SBC湘南美容クリニック柔道部関係者

表3 オリンピック柔道競技における日本の獲得メダル数

開催年	開催地	階級	金	銀	銅	総数
1964	東京	男子4階級	3	1	0	4
1968	メキシコ	実施されず	-	-	-	-
1972	ミュンヘン	男子6階級	3	0	1	4
1976	モントリオール	男子6階級	3	1	1	5
1980	モスクワ	ボイコット	-	-	-	-
1984	ロサンゼルス	男子8階級	4	0	1	5
1988	ソウル	男子7階級	1	0	3	4
1992	バルセロナ	男女14階級	2	4	4	10
1996	アトランタ	男女14階級	3	4	1	8
2000	シドニー	男女14階級	4	2	2	8
2004	アテネ	男女14階級	8	2	0	10
2008	北京	男女14階級	4	1	2	7
2012	ロンドン	男女14階級	1	3	3	7
2016	リオデジャネイロ	男女14階級	3	1	8	12
2020	東京	男女14階級, 混合団体	9	2	1	12
2024	パリ	男女14階級, 混合団体	3	2	3	8

表4 パリオリンピックメダル獲得国ランキング²⁾

	国名	金メダル	銀メダル	銅メダル	総メダル数
1	日本	3	2	3	8
2	フランス	2	2	6	10
3	アゼルバイジャン	2	0	0	2
4	ジョージア	1	2	0	3
5	ブラジル	1	1	2	4
6	ウズベキスタン	1	0	2	3
7	カザフスタン	1	0	1	2
8	カナダ	1	0	0	1
8	クロアチア	1	0	0	1
8	イタリア	1	0	0	1
8	スロベニア	1	0	0	1
12	韓国	0	2	3	5
13	イスラエル	0	2	1	3
14	コソボ	0	1	1	2
15	ドイツ	0	1	0	1
15	メキシコ	0	1	0	1
15	モンゴル	0	1	0	1
18	モルドバ	0	0	2	2
18	タジキスタン	0	0	2	2
20	オーストリア	0	0	1	1
20	ベルギー	0	0	1	1
20	中国	0	0	1	1
20	スペイン	0	0	1	1
20	ギリシャ	0	0	1	1
20	ポルトガル	0	0	1	1
20	スウェーデン	0	0	1	1
	合計	15	15	30	60

V. 審判

東京オリンピック後にルール改正³⁾が行われ、頭から突っ込む形のダイビングや相手の組手を切り離す行為に対して厳格に罰則を適用されることとなり、必然的にそうしたペナルティが宣告される場面を多く目にするようになった。東京大会についての報告で述べたように⁴⁾、過去大会でも見られていた、オリンピックにおける技での決着を望む傾向が一段と強まった前回大会ではあったが、今回はそうした傾向があまり見られなかった。逆に厳しくペナルティを適用されることもあって、テレビを通して観戦した日本人の一般視聴者には、深く理解していない指導での決着が多く、審判理事の訂正、指示による判断の変更も多数みられたことから、ルールに対しての不明瞭さや指導での決着に対して、「指導ゲーム」という印象を持たれる結果となった⁵⁾。パリオリンピック後にはロサンゼルスオリンピックに向けて、ルールの改正が行われることとなっており、今後、一般の観戦者や視聴者に対してよりわかりやすいルールへと変更になるよう、全日本柔道連盟内に発足されたルール検討委員会内で取り組んでいきたいと考える。

VI. 早期内定制度について

前回の東京オリンピックに向けて採用された早期内定制度下での好結果を考慮し、パリオリンピックに向けては更に内定時期を早める対策が取られた。最速の内定については2023年6月29日の強化委員会で審議され、直近の世界選手権を制した阿部一二三、角田夏実、阿部詩、新添佐季の4名の内定が決まった。また8月23日には橋本壮市、永瀬貴規、村尾三四郎、斎藤立、舟久保遥香、素根輝の6名が内定を得た。そして、12月2、3日のグランドスラム東京大会の結果を経て、新たに永山竜樹、高市未来、高山莉加の3名が追加され、残すは100kg級のみとなった。その100kg級はグランドスラム・パリ大会の結果から2024年2月14日の強化委員会にて、ウルフアロンの内定が決定し、14名の代表内定者が出揃うこととなった。数か月差の内定時期の遅速により、結果への影響を推察することは稚拙の域を出ないため、結果についてのみを記載する。6月内定組は金メダル：2名、メダルなし：2名。8月内定組は金メダル：1名、銀メダル1名、銅メダル：2名、メダルなし：2名。12月内定組は銅メダル：1名、メダルなし：2名。そして翌年2月では、メダルなし：1名という結果であった。次回のロサンゼルスオリンピックに向けて、更なる検証を行い、内定時期を含めて、検討が必要であることは言うまでもない。

VII. おわりに

アテネオリンピックから始まった了徳寺柔道チーム（現SBC湘南美容クリニック柔道部）のオリンピックへの挑戦は、アテネ大会補欠4名、北京大会4名出場のうち2名が7位入賞、ロンドン大会銀メダリスト1名、5位入賞1名⁶⁾、そしてリオデジャネイロ大会では2名が補欠に甘んじるという厳しい戦いが続いた。そして自国開催で向えた東京オリンピックにおいて、ウルフアロンが金メダラー号となった⁴⁾。続くパリオリンピックでは、角田夏実が金メダルを獲得し、永山竜樹が銅メダルを掴み、これで、日本柔道界において3冠（三大タイトル）と認識されるオリンピック（ウルフアロン、角田夏実）、世界選手権大会（秋本啓之、田中竜馬、福見友子、西田優香、佐藤愛子、志々目愛、角田夏実）、全日本選手権大会（ウルフアロン、緒方亜香里）において、男女共に優勝者をチーム所属選手より、輩出する結果となった。

2023年1月に法人変更に伴い、SBC湘南美容クリニック柔道部として同年4月より活動継続にご理解をいただいた相川佳之理事長をはじめとするSBCグループ、及び大学関係者のご指導、ご支援の賜物であると心より感謝を申し上げたい。引き続き世界選手権、オリンピック大会でのチャンピオン輩出を目指して精進していきたいと思う。

VIII. 文献

- 1) The International Olympic Committee (2024), シャン・ド・マルス・アリーナ, <https://olympics.com/ja/paris-2024/venues/champ-de-mars-arena> (2024.10.22 10:00 アクセス)
- 2) The International Olympic Committee (2024), 名所で競技観戦！パリ2024オリンピックの競技会場11選, <https://olympics.com/ja/news/discover-iconic-sports-history-venues-paris-2024> (2024.10.22 10:00 アクセス)
- 3) International Judo Federation (2022) Judo Rules - Olympic Cycle 2022-2024, https://78884ca60822a34fb0e6-082b8fd5551e97bc65e327988b444396.ssl.cf3.rackcdn.com/up/2022/01/IJF_Refereeing_Rules_update_20-1641892153.pdf (2024.10.26 14:00 アクセス)
- 4) 山田利彦 (2022) 第32回オリンピック競技大会 (2020 / 東京) における了徳寺大学職員柔道部の成果報告. 了徳寺大学研究紀要. 16, 15-28.

- 5) The DISEST「もうこれ指導ゲーじゃん」会場から“大ブーイング”を受けた柔道の決勝戦に日本人ファンも不満爆発！「見えて全く面白くない」【パリ五輪】，https://thedigestweb.com/topics_detail13/id=84032（2024.10.26 17:00 アクセス）
- 6) 山田利彦（2013）ロンドンオリンピック柔道競技報告．了徳寺大学研究紀要．7, 9-17.

2024年12月25日 受理
SBC東京医療大学研究紀要第19号